

認知症の実親介護と死別の中で経験される子としての自己との向き合い —親への思いの変容に着目して—

人間福祉学科 生涯発達支援系 岡田華奈

実親介護において、子は介護者となってもなお、親の子である価値や意味を再確認することで、変わりゆく親の姿を受容できるとされてきた。

本研究は、認知症の母親の在宅介護、および死別を経験した子が、自身の親や子である自己とどのように向き合うのかについて検討することを目的とした。

3名へのインタビュー調査の結果、子が親の介護を担う理由として、親のためだけではなく自身のためであることが示唆された。親の老いの認知を契機に親と過ごす時間に限りがあることを実感すると、これまでの親子関係の中で後悔している関わりが浮き彫りとなり、それを介護を通して解決しようとしたためであった。

死別後においては、生前母親に対し憤りを抱えていた場合でも、時間をかけ母親とのつながりを受け入れながら、[自己の基盤を形成した存在]として母親のことを認識することが可能になっていた。これは、母親と過ごした時間や環境、養育など様々な影響により自身が形成されているという自己理解へとつなげていたといえる。

本研究を通して、子が親や自己と向き合い、親の子である感覚を持ち続けることは介護や死別を乗り越えるために重要なことであると考えられた。